
帰笑天昇結

空想の彷徨い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰笑天昇結

【Nコード】

N0282M

【作者名】

空想の彷徨い人

【あらすじ】

長編はまだ技術的に難しいですし、リズムを重視した短編を書いてみました。

現代の怪奇ものを想定して書いていますが、読み返してみると特にこだわりは無い様です。

初投稿の未熟者ですので、色々なご指摘を頂けると勉強になります。

よろしくお願いいたします。

？

街灯の光がほとんど差し込まない裏路地を、私は一人歩いていた。暗い夜道のリスクより、誰にも会いたくない気持ちのほうが強かった。

私以外の足音に気付いたのは、表通りからかなり奥まったところだった。

わざと足音を立てたのだろう。・・・気配は突如背後に現れた。ゆっくりと振り返る私。

パーカーのフードを目深にかぶったソイツは、口元を歪めて近づいてきた。

次の瞬間、私の足は勝手に走り出していた。

何処を、どう走ったのか分からない。

どこかの袋小路に着いて、やっと足は止まってくれた。

コンクリートの壁を背に、ソイツと対峙する。

（どうして私は逃げたのだろう。生きる事に執着なんて無いのに。いや、ここに誘ったのかな？ここなら叫んでも誰も来ないから）などと、客観的に分析している自分がいた。

ソイツは一度立ち止まった。距離にして5m。

一跳躍で眼前に迫ってきた。一瞬のことだった。

私はとっさに両手で顔を庇いながら、呟いた。

「私、今、笑ってるかな？」

ソイツのナイフは眼前に迫っていた。

？

穏やかな日差し差し込む午後の教室は、

授業が終わった事もありむしろ気だるい雰囲気醸し出していた。

「ねえ、霞^{カスミ}聞^きいてる？」

色白で端正な顔が私の瞳を覗き込む。

この娘は橘^{タチバナ}愛子^{アイコ}。私の親友。

黒いロングヘアーが私の手に触って、くすぐりたい。

ぼーっとしていた私は、その感触によってこちら側に呼び戻された。私は曖昧に返事を返した……のだろう。

「じゃあ、放課後はカラオケに決定！」

彼女はそう言って、割引券をヒラヒラと振ってみせた。

（このコ、また気を遣って……）

考えていた事が、顔に出たのかもしれない。

「そんなんじゃ、亡くなったお兄さんに笑われるよ！」

何だつけ……”人生は長さじゃない。笑って死ねたらそれでよし”って。

今を楽しまなきゃ！人が生きられるのは”今”って瞬間だけなんだから」

大げさな手振りのアイコに、微笑み返す。

（あれから3ヶ月か……）

兄は、プロのモトクロス選手を目指していた。

プロ試験を目前に控えた練習中、ハンドル操作をミスした友人のバイクに

巻き込まれて死んだ。

友人の方は軽傷で済んだらしく、松葉杖を突いて葬儀に参列していた。

泣き崩れる彼の肩に手を置き、父さんは言った。

「息子は好きな事をやって、こうなったのだから。」

君は胸を張って、自分の夢を掴んでくれ！」

息子を送るその姿は誇らしげだった。

私も見たはずなのに。兄はどんな顔をして逝ったのか・・・思い出せない。

私が兄の事を悲しんでいる様にでも、見えたのだろう。見当外れもいところだが、その気遣いは嬉しかった。

「ならその後で、ちよつと話そうよ。パフェのおいしい店、見つけたの」

「じゃあ、張り切ってカロリーを消費しておかないと!」

（このコは、私には過ぎた友人だな）

眩しいほど輝く彼女の笑顔を見ながら、そう思った。

2人きりのカラオケは、19時過ぎまで続いた。

何を歌ったのか、覚えていない。

店を出て、メールをチェックするアイコの顔色が一瞬で変わる。

「ごめん! あたしすぐに帰るね。望^{ノソム}が病院に運ばれたって!

後で連絡したいけど、病院はケータイ使えないから・・・明日詳しく話すね!」

言い終える前に走り出していた。

（大変だな。あゝあ、これで今日は私のグチ、聞いて貰えないな。私にはあんなに一生懸命になれるものなんて・・・無いな）

?

翌日、アイコは欠席した。

朝のHRで担任はいつもと変わらぬ口調で言った。

「あゝ明日の19時から橘の弟さん、望君の通夜が行われます。

嫌な話ですが、弟さんを襲った通り魔はまだ捕まっていますので」

今頃アイコは、悲しみに暮れているのだろう。

（あゝあ、これでもうあのコにはグチれないな・・・

まさか、死んだ兄貴が羨ましいなんて言える訳ないし）

そう思うと、葬儀に出席するよりも気が重くなった。

学校側は生徒の安全を考え、昼過ぎに集団下校となった。私は何もする事がなかったので、橘家を訪れた。

この時初めて、『アイコの両親が既に亡くなっており、代わりに親戚の家に身を寄せて居る事』を知った。

叔母さんが泣きながら話してくれたのは、こんな事だった。

『塾の帰りに近道をしようと、裏道に入ったノゾム君を通り魔が襲った』

『争った形跡がないことから、不意打ちだったのだろう』

『しかしすぐには殺されず、死因は出血死だった』

『遺体は損傷が激しく、事切れてからの傷もあった』

『犯人は、まだ捕まっていない』

結局その日、アイコには会えなかった。

（こんな時、親友に何も出来ないとは・・・

ノゾム君の代わりに、役立たずの私が死ぬべきだよね）

こんなことを、考えていたからだろう。

帰り道に、商店街の裏路地を選んだのは。

？

「私、今、笑ってるかな？・・・ダメ！笑えない！！」

そう呟いた瞬間、全身を悪寒が走りぬけた。

（消エロ！スベテ、消エテシマエ！）

頭の中で誰かが叫んだ。それは私の声にそっくりだった。

ふいに全身が脈打って、視界が激しく揺れだした。

振り上げられたナイフは、私に届く事はなかった。

正確には私に触るより先に、ソイツの肘から先が消滅したのだ。

同時に反対の手に隠し持っていたナイフが、わき腹をえぐるように突き上げられた。

不意打ちの刃もまた、ソイツの手首ごと消滅する。

「くそ！何なんだ、てめえは！この化け物め！」

だが次は不意打ちで必ず殺す！”力”を手にした俺は最強だ！

誰も俺を捕まえられねえ！誰も見つけれられねえんだ！」

私に背を向け、両手から血を撒き散らしながら・・・消えた。

もつともあの出血では、長くは保たないだろうが。

（何で私はまだ生きているの？殺人鬼ならちゃんと殺しなさいよ！）
苛立ちと共に、強い頭痛が襲ってきた。

立っているのが辛くなり、ふらついて背中が壁に触れた。

冷たい壁は音もなく消滅し、私は仰向けに倒れた。

全力で走った時の様に鼓動が早くなり、視界は赤く染まり・・・私は気を失った。

？

冷たい夜風で意識を取り戻した私は、まだ動けず目だけで辺りを見回した。

”暗い”路地には新たに二つの人影があった。

一つは黒髪の短髪に180cm近くある長身。トレンチコートを纏っている。

黒いサングラスのせいで顔は良く分からない。

もう一つは、金髪のショートカットにセーターとスラックスを着た小柄な女性。

こちらも背を向けているので顔は見えない。

「結局、2人も被害者を出してしまったな」

男の低い声が流れてきた。思ったよりも、体格がいいのかもしれない。

「それでも・・・続けるしかありませんわ。終わりのない仕事です

けれど」

空を仰ぎ見る女は、若くしかし、老人の様に疲れた声で言った。

いつ来たのか、二人は私の傍らにいた。体はまだ動きそうにない。
「一人消えて、一人目覚めた。本当に終わらない。・・・君はどっちだ？」

つぶやく男の声と共に、私の体が持ち上げられた。

再び意識が途切れる直前、一緒に居た女性の顔が見えた。

（綺麗な人・・・）

路地には大量の血と、一つの物が残された。

既に事切れ、”両手にナイフを持った”さっきの男。

明朝”通り魔”として、新聞の一面を飾る男が。

？

その日のニュースでは、被害者の少年の葬儀が滞り無く終わり、犯人が死体で発見されたとの情報も報じられた。

この知らせに町は落ち着きを取り戻し、退屈な日常が舞い戻ろうとしていた。

しかし通り魔殺しの犯人を追う警察以外に、この事件を忘れられない者がいた。

結局アイコとは、あの日以来会えなかった。

？

「で、いったいあなた達は何者なの？」

ホテルのベッドで目覚めた私は、部屋の二つの気配に聞いた。

既に陽は落ちていたが、明かりはついておらず、張り詰めた空気に満たされていた。

「目が覚めたか。意識もはっきりしている様だな」

声はあの男のものだった。彼の声には安堵の響きが含まれ、急に空気が和らいだ。

もうひとつの気配は微動だにしない。

「俺の名は視郎^{シロウ}。そっちは久遠^{クオン}。短い付き合いになるが一応、な」
ベッドの傍の椅子に腰掛けた男は、外から入る月明かりに意外とがつちりとした

シルエットを浮かばせていた。

「宝条 霞よ。”短い”のはこの体の変化のせい？」

視線を天井に移して、シロウに問い返した。

「思ったよりも、落ち着いているな。・・・君の言う通りだ」

サングラス越しに私の顔をまっすぐと見据えて、静かに言った。

「たったそれだけの説明で、納得すると思う？」

私はまだ、天井を見つめていた。

「地球上にいる生き物の中で、どうして人類だけがここまで繁栄できたと思う？」

無論これには諸説あるが、ある生物学者はこう言った。

”馬の脚力、ゴリラの怪力、鳥の飛行能力の様に、人類にも種固有の能力が在った。

それは他の種同様、肉体のみで使えたはずだと”

しかし他の種が淘汰される中、一つの能力だけで今の繁栄を手にするのは難しい。

仮定された能力は”強く思う事で現実を改変する力”・・・言い替えると超能力だ。

もつとも出来る事は、その個体の精神構造に合わせた1、2種類だけだったらしい。

後に”科学”が発達し、その過程で”法則を乱す力を持つ者”は迫害され、滅びた。

だが元々素養ある・・・つまり先祖帰りを起こした個体が、生存本能を脅かす位強烈な

ストレスに晒されると、その力が呼び覚まされ、君の様に変化が

起きる」

静かだが、否定を許さないシロウの言葉。

「やっぱり学校の勉強なんて役に立たないのね・・・それが真実なら」

耐え切れず、虚空に投げ出した私の言葉が消えると、シロウは続けた。

「しかし力に目覚めても、それに適応できる者は殆どいない。

単刀直入に言おう。君の命は・・・持ってあと数日だろう。

今は小康状態を保っているが、今も君の肉体を”力”が蝕み続けている。

これには防ぐ手立てがない。君自身にも、な」

あえて事務的な口調。案外いい人なのかもしれない。

「そう。まあ、いいわ。ちょうど”きつかけ”が欲しかったし。

ものを消し去る力か・・・何の役にも立たない力ね。

もう、ダイエットの心配はなさそうだけど」

（空虚な私には、お似合いなのかもね・・・）

対する私はどこか他人事。思ったよりも私は、嫌な奴だった。

「ところで二人は、あそこで何をしていたの？」

自己嫌悪ついでに、気になっていた事を口にした。

傍の頭上でクオンが初めて口を開いた。思ったよりも近くに立っていた。

「尻拭いですわ。非適応者が、一般人にご迷惑をかけない様に・・・の。

力に目覚めた場合、殆どの方が自分の力に耐え切れず即死します。生き延びても、肉体や精神の負荷に耐え切れず凶暴化してしまうケースが殆ど。

・・・所詮は淘汰された不完全な力なのですわ」

彼女の声には、微かな自嘲の響きがこもっていた。

被害者を出したのは、これが初めてではないのだろう。

「まだ気になる事があってな。俺は彼女と共にこれから出かける。

君はどうする？」

「カスミ。そう呼んで。残りの時間をこのままベッドで過ごすよりは、マシかな」

数分後、私たちは部屋を後にした。

「力に目覚めた事で、君は何を得るのだろうか？」

聞くもの無いシロウの言葉は、部屋を漂い・・・消えた。

？

シロウの力を頼りに一晩中歩いたが、その夜は何も起きなかった。翌日も同じ。

本来ならシロウの杞憂で終わるはずだった。

しかし3日目に回った最後の路上には、無残に引き裂かれた死体が残されていた。

新聞には再び通り魔の文字が躍り、学校は休校になった。

私は二人と共に、最後の時間を過ごしていった。

『なぜ私は大事な事に気付かなかったのだろうか？』

そんな事よりも大切で、意味あることがあったはずなのに。

それには残りの人生を、全て費す価値があったのに・・・』

日が経つにつれ力の侵蝕は酷くなり、歩くだけでも動悸や眩暈がした。

体を引きずる様にして、それでも私は”彼らと言う非日常の中”で時間を過ごした。

私の命が消える日、”私達”はやっと逢えた。

？

深夜に辿り着いた場所は、私も良く知っている公園だった。

私”達”の思い出がいつぱい詰まっている場所。

静かに立つその姿は、暗い公園の公園の街灯に浮かび上った。

血にまみれた蒼白いシルエット、漆黒の闇に溶ける長い髪は幽鬼を連想させた。

シロウはソイツを一瞥すると、「”視る者”の仕事はここまでだ」と言い残して消えた。

「何よあいつ。男のくせに敵前逃亡？」あっけにとられる私を外に、「そうじゃないの。ここからは”終わらせる者”の仕事なのよ」と呟き、

音もなく”ソイツ”にクオンは近づいた。

目で追うのがやっとの、人ならざる者たちの力の応酬。

一般人をはるかに凌駕していたが、彼女の力は戦い向きではないのだろう。

クオンは、数瞬で地に膝を着いた。

「戦う力も無いのに、どうしてこんな事を続けているの？」

彼女に駆け寄り、しかし聞かずには居られなかった。

「約束がありますの。大切な人との約束が。」

だから私は無限とも言える時間を、これからも生きて行けるのですわ。

力に翻弄された可哀想な子達を、安らかに送って差し上げますの。新たな適応者を、生み出さない為にも。

それがあの方の果たせなかった責任、私の叶えたい夢ですわ」

私は今、なぜあの時”クオンを綺麗だ”と思ったのが分かった。

悠久の時を生きていても、彼女には明確な生きる意思があり、目的がある。

そして・・・恋する女性綺麗なのだから。

？

「ノゾムは、何も悪い事なんてしていない！弟を・・・弟を帰して！！」

クオンを制したソイツは、何も出来ない私を無視して一心不乱に叫んでいる。

いや彼女にとって、既に外の世界は認識されていないのかもしれない。

「あれがアイコなの？どうしてっ！正気に・・・元に戻る方法はないの！」

私は目の前にいる女性に詰問した。

「あの娘が私たちの探していた2人目の犠牲者よ。」

一人目が襲われた晩に襲われたの。死体が発見されないと思ったら。

・・・やはり彼女も。

・・・実は貴女に話していない事がありますの。

それは能力者との接触により、連鎖的に覚醒が起きるってことなの。

”力”との接触は、周囲の人間の秘められた力を刺激してしまう”

私の目の前で自らの髪を引きちぎり、身体をズタズタに引き裂いて、

アイコは”泣いた”。いや”哭いた”。

唯一の肉親と自らを殺した犯人が、罪を償わずに勝手に死んでしまったせいで、

その感情は行き場のないものとなっていた。

図らずも、犯人を勝手に殺してしまったのは私だ。

シロウは言ったはずだ・・・強いストレスが引き金になると。

こうなる前に、私にはやるべき事があったのだ。

それでもあきらめきれずに、クオンにもう一度詰め寄る。

「ねえ！アイコを助ける手段はないの？」

顔を伏せたままのクオン。声だけが風に乗ってきた。

「もう、そうなくては無理ですね。彼女は心が壊れてしまっていま

すもの。

心が滅び、体が残る・・・ちょうど貴女の逆ですわ。
心が消えた肉体は居もしない敵を求めて、破壊を続けてしまいま
す。

彼女の力は、限界の無い再生能力。”存在を消されない限り”死
ぬ事はないわ・・・」

まだ顔を上げない彼女には、分かっていたのかもしれない。こうな
る事が。

XI

全身の悪寒は、動悸となって襲ってきた。

（どうしてこんな事に、なってしまったのだろうか？）

体が鉛のように重く、頭痛が酷過ぎて視界が霞む。

（全てはちよつとした運命のいたずら。ボタンの掛け違い。

でも嘆いては居られない。時間は有限だ。タマキにも・・・私
にも）

「私には、漠然と生きているこの世界が空虚に思えて。

消えて無くなれば良いと思ったの。

だから私の力は、全てを消滅させる能力になったんだと思う。

（そうか。この力で一番消したかったのは、こんな私自身だったん
だ！）

・・・でもそれは大切なものを、消すためじゃなかったんだよ？」

答えるものは無く、一筋の涙がほほを伝う。

「正しいとは思えないけど、これで精一杯なの。

・・・ねえ、お兄ちゃん。私、これで良いんだよね？」

答えてくれたのは、兄の最後の顔。・・・笑顔だった。

アイコがこちらに振り向いた。距離にして5 m。

一跳躍で眼前に迫ってきた。一瞬のことだった。

私はとっさに両手で顔を庇いながら、呟いた。

「私、今、笑ってるかな？」

アイコのナイフのような爪は眼前に迫っていた。

全てを引き裂く鋭さと、凄まじいまでの力を持った爪。

それは何の目的も無く、狂気だけを宿した妄執の刃と化していた。

体に触れる瞬間・・・失ったものを求めて彷徨う爪は、ただ静かに無に帰した。

私は静かに、親友を抱きしめた。

いや、抱きしめるはずの彼女の体は、私に触れることなく・・・消えた。

次の瞬間、私の世界は静かに反転した。

0

急激な力の発動は、私の体の機能を殆ど奪った。

脳の大切な部位でも消えたのだろう。五感が喪失していた。

消滅に伴うであろう痛みが無いことが、唯一の救いだ。

暗転した視界が、不意に戻った。まず目に入ったのは、仰向けに

寝かされた私だった。

傍には私の手を握ったクオンが俯いている。

閉じた瞼、呼吸をしていない鼻と口、何も聞こえない両耳・・・全
てから出血している。

「ほんの少しだが俺の目を貸してやる。自分の最後をしつかり見届
ける」

背後からシロウの声がした。聴覚は既に失っているが。

「親友を殺らせた上に、こんなものまで見せるなんて。本当に最低
ね！」

吐き捨てるように言っ たつもりだが、何処まで伝わったのかは分か
らない。

「いや、こんなことまでさせたからな。せめてもの気持ちだ。俺か
らの」

ばつの悪そうな声が響く。やはり彼は善人だった。

「ありがとう、もう行くわ。クオンにも伝えて。あなたにも感謝してるって」

再び感覚が喪失する。私以外には何も無い・・・静寂。

「俺が言わなくても、もう伝わってるよ。お前のその顔を見ればな」
誰に言うでもなくシロウは呟いた。傍らには静かに天を仰ぎ見るクオン。

「おまえは見つけたんだな、最後に。笑って天に帰る生き方を・・・」

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0282m/>

帰笑天昇結

2010年10月28日00時56分発行